

# Action for Butterflies

## チョウの舞う豊かな自然を将来へ

青空を背景に跳ねるアカハネバツタ



## アカハネバツタ

～地域での草原管理を手伝いながら、調査を進めています～

アカハネバツタは、日本国内では絶滅したのではないかとわれていましたが、2012年の新潟県での再発見以降、6年間で長野県（2地点）、新潟県（1地点）、山形県（1地点）、福島県（1地点）の合計5地点での生存が確かめられています。2016年に環境省の種の保存法の指定種になりましたが、非常に良好な半自然草原にのみ生息しています。

国内にどの程度生存しているのかも、徹底して調べています。新潟県で再発見した酒井孝明氏と、山形県で再発見した私とが、可能性のありそうな場所をそれぞれ独自に調べ、青森県から鳥取県まで、二人分を合わせると延べ

150ヵ所の草原を調査しましたが、上記の他には発見できませんでした。国内には生息の可能性が高い場所が、あと1～2ヵ所だけ未調査のまま残っていますが、少なくとも「今後も次々に見つかる」という状況にはありません。それぞれの生息地が孤立し、生息面積も極めて狭いことから、状況としては「2000年当時のヒヨウモンモドキ」「2010年当時のウスイロヒヨウモンモドキ」とほぼ同じ段階にあります。これらの種が、その後の10年間でどのような経過をたどったかは、このニュースレターで何度もお知らせしてきた通りですが、現在ではいずれも、野外にはごくわずかな個体群が残っているだけとなってしまいました。アカハネバツタがチョウ類と同じ経過をたどるかどうかは不明ですが、過去に多くの昆虫の地域絶滅の経過を見てきた立場としては、繰り返さないように最大限の努力をせねばと思います。

アカハネバツタは2016年に種の保存法の指定種になりましたが、私はロシアと山形県とで重点的に調査を続け、あ

る程度の生態を解明していたことから、実効性のある保全対策を確立するため、調査を継続するとともに、山形県では実際の保全対策も試行しています。

山形県の生息地は、集落の共有地として維持管理が続けられている草原で、現在はワラビ園として利用されています。そこに、クロシジミ、ホソハンミョウ、セアカオサムシ、ミカゲゴモクムシ、クロスジカメノコハムシ、ショウリヨウバッタモドキなどの草原性の昆虫が生息しており、近隣では他に類をみない多様さが保たれています。本来であれば、法で指定された種が見つからない場所でも、ひとつおりの普通種が揃っている環境を維持してゆくことが自然環境の保全の本質なのですが、今の日本では、種の保存法もしくは都道府県条例の指定種であることを旗印にしなければ、行政からの支援を得ることは難しいのが実情です。社会の仕組みにあわせて、ある程度の優先順位をつけていかざるを得ません。アカハネバッタの生息地は、1カ所を除いて、他のあらゆる指定種が存在しておらず、保全の必要が叫ばれながらも一切の対策がとられてこなかった場所ばかりでしたので、この機会を活かして草原を存続させる具体的な仕組みを作ってゆかなければ、いずれも手遅れになるでしょう。

まずは、アカハネバッタの詳しい生態を明らかにせねばなりません。山形県での調査結果はいずれ論文として出しますが、個体数および成虫の活動場所、そして移動を調べるための、標識再捕獲調査に重点を置いています。成虫の個体数は合計で100個体に届かず、これほどの少なさは、これまでの昆虫の個体群動態の調査経験でも、他にあまり例を知りません。また、草原自体は広くとも、成虫・幼虫が生息している場所は1辺がせいぜい20メートル程度の数地点に限られ、それぞれの地点間の交流さえ、まったく認められません。感覚的には、草原性の昆虫であれば、3~4ヘクタールの範囲内に生息している微地点がせめて10カ所程度あって、互いに交流があるという状態でなければ、長期的な存続は難しいのではないかと考えていますので、地形に応じて試行的な草刈りを行い、個体の移動や植生の変化を調べています。

こうした調査や草刈りのために、夏期には人が入れ替わりながら、生息地に週に2~4回の高頻度で通うことが続いています。この調査と各種の作業は、私と緒勝祐太郎氏（当協会会員、福島大学院生）を中心に、山形大学などの学生の皆さんの協力を得ながら進めています。さらに、何を食べるのか、どこに産卵するのかという基本情報が、一切明らかになっていませんでした。そうしたことも、飼育によってひとつおりの解明しました。もっとも、最も好んで食べたのは植物ではなく新聞紙でしたが。

地域の草原は集落の共有地ですので、「調査をする」「草刈りをする」という我々からの依頼についても、ひとつずつ対応が可能かどうかを集落の合議で決めていただかねばな



アカハネバッタを捕獲し標識する



標識したことで個体識別ができ、行動が追跡できる



火入れは集落総出で行われる



熟練者が火を操ってゆく



火入れの2週間後、ワラビ園が開園する



丈の高い草原を刈って裸地をつくる



通路沿いにも裸地が出るよう、手で刈り進めた

りません。希少種の保全といえば、緊急性と必要性だけを強調しつつも、そうした「当たり前の手順」をすっ飛ばし、外部の人間が錦の御旗のように「守りましょう」と繰り返す場面が少なからず見受けられますが、それは長年の地域住民の方々の努力を全く無視して、敬意を払わないことと同じですし、余計な負担を押し付けることになります。人口の減少と高齢化が進むなかで、地域社会にとっての「余計なこと」を受け入れていただくには、私たち自身が、地域の方々に信頼を得るまで通い続けるしかありません。当協会ですまざまな活動を進めるにあたり、最も気を遣っているのが、手順を守り、礼儀を欠かさないという部分です。ただ、今回も地域の様々な実情を知るまでには、多くの礼儀の欠落がありましたし、その都度、地域の代表の方が深いご理解のもとで好意的に対応してくださったことで、今に至っています。

現在では、春の火入れおよび夏の草刈りに必ず顔を出している他に、地区のお祭りやワラビ園の運営なども交代で手伝いに行くなかで、草原管理をはじめとした地域の生活文化を教わり続けています。実際の火入れなどの現場では、やはり足手まといになる「お客さん」でしかありませんが、それでも、地区で長年行われてきた方法を尊重しながら、生活の知恵の結晶としての草原の維持管理を教わり続け、そしてその結果としてアカハネバツタやクロシジミが存続すればと考えています。

春の山焼きは、年ごとの積雪量にも左右されますが、連休明けの週末に行われます。お手伝いいただける方があれば、事務局までご連絡をいただければ幸いです。

なお、現地調査や保全活動等の一部は、環境省事業および地球環境基金による支援を受けています。

(永幡嘉之)